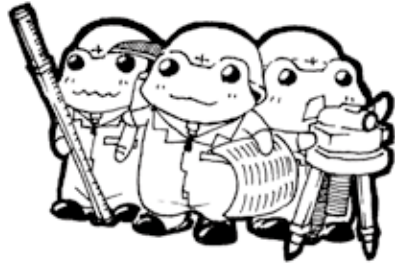


いわかげ

— No. 116 2008, 10, 14

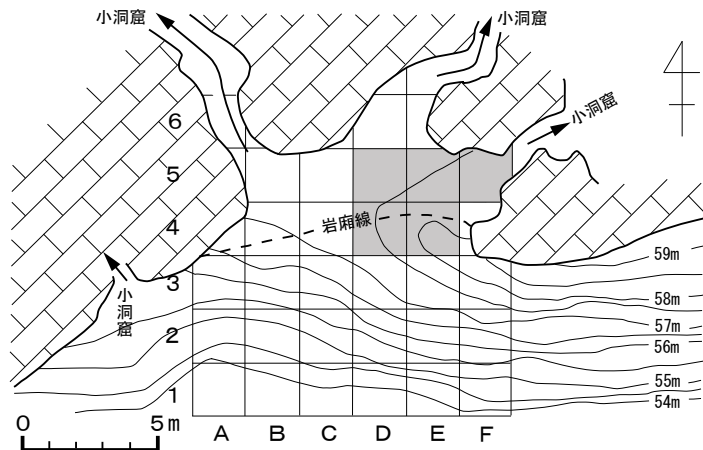
— 広島大学文学研究科考古学研究室・
帝釈峡遺跡群発掘調査室



2008年度 帝釈峡遺跡群・庄原市佐田峠墳墓群発掘調査 Ⅲ期（8月26日～31日）

帝釈大風呂洞窟遺跡第13次調査

今期の大風呂洞窟遺跡では、Ⅰ期とⅡ期に引き続き、縄文時代前期～後期にあるとされる遺跡東半部の第3層の調査を行いました。以前に調査された西半部では土器や石器などの生活の痕跡が多く出土していましたが、今年の東半部の調査では土器や石器が不思議なことにほとんど出土しませんでした。この違いが何を意味するのか、大変興味深い調査



第1図 帝釈大風呂洞窟遺跡調査区配置図

（網掛け部が今年度の調査範囲）

課題として浮かんできました。その原因としては（1）遺跡東半は西半とは全く違う使われ方をしていた、（2）東半ではまだ掘り足らず人工遺物が出る面まで達していない、などの理由が考えられました。その答えを出すためには、東半の第3層全体の調査を待つ必要がありますが、その手掛かりを探るため今年度はD-4・E-4区の北端沿いの幅30cmの部分を行って掘り下げました。しかし、土器や石器は出土せず、（1）の可能性が強まりました。ただし、調査範囲が限られているため、結論は来年の調査まで持ち越しになります。

また、今年の調査の成果としてはD-5区では焼土（昔の人が火を用いた跡）が、D・E-5区では土坑（昔の人が掘った穴）を確認できたことが挙げられます。西半の第3層の調査でも焼土は見つかっていましたが、いずれも痕跡的なもので、今年度発見されたようなしっかりした焼土面が見つかったのは初めてです。調査していくうちにD-5区の焼土は複数検出されました。また、焼土が互いに重なりあって検出される個所もあり、D-5区周辺は火を使う場所として、数時期に及んで使われていることが分かりました。D・E-5区の土坑についてはその規模を正確に把握し、昔の人が

どのような用途でこの穴を掘ったのかを推測しながら調査しました。今年は南半分の調査を行ない、底の付近で径5cmあまりの小型の礫がまとまっている状況が確認できました。まだ土坑の性格ははっきりしませんが、底部に集中する礫は何らかの意図を反映しているものと思われます。来年度の調査でこの土坑の性格を解明したいと思います。

今年度の発掘調査は終了しましたが、すでに調査を終えている遺跡西半部分における第3層とも照らし合わせ、今年度の調査成果について考察を進めていきたいと思えます。なお、遺跡の現地説明会を8月29日に予定していましたが、大雨のため残念ながら中止となってしまいました。来年も現地説明会を計画したいと思いますので、その際にはぜひお越し下さい。
(3年 竹内琢也・若月美佳)

コラム1 僕の発掘生活

僕は今年の発掘調査で全ての期間参加しました。Ⅰ期とⅢ期は帝釈大風呂洞窟遺跡、Ⅱ期は佐田峠墳墓群C地区3号墓に行きました。Ⅰ期は遺跡まで登るための階段作りや道具などを置いておく小屋の建設、排土水洗場の設置など発掘には直接関係のない作業ばかりを行い、個人的な用事で早く帰ったこともあり、発掘自体ができたのはたった1日だけでした。



Ⅱ期の佐田峠墳墓群では、初日から発掘に参加することができました。表面の土を少しずつ削っていく大風呂での掘り方に慣れてしまった僕にとって、目的の土層まで床面を下げる掘り方は「こんなに荒々しくて大丈夫なのだろうか」と思ってしまうほど大胆なやり方でした。つい調子に乗って重要な土層を深く掘り過ぎてしまい、先生や先輩方に注意されることもありました。遺跡の違いで掘り方が異なることをⅡ期で痛感しました。

Ⅲ期は再び大風呂に戻り発掘を行ないました。Ⅰ期で汗水垂らして作った階段が、痛んで元の状態に近づいているのを初日に目にしたときは、覚悟はしていましたが僕には大きなショックでした。

約1ヶ月間でしたが、実際の発掘に参加できたのはこれから僕が考古学を勉強する上で、貴重な財産になると思います。先生方や先輩方から頂いたアドバイス等を、今後に活かしたいと思います。

(2年 安部智洋)

さ た だおふんぼぐん
佐田峠墳墓群

佐田峠墳墓群C地区3号墓での第Ⅲ期調査においては、主にⅡ期調査までに発掘した各トレンチの平面図や断面図などの図面を完成させることを目標としました。また、図面作成にあたって、土層の堆積状況を正確に把握し、本遺跡の墳丘の土がどのように盛られて築かれていったのか、また、3つの棺がいかなる順番でどうやって作られたのかを調べていきました。



写真1 佐田峠3号墓（東から）

これらは、トレンチ壁面の土層を見ることで判断することができます。主に土の色や質の微妙な変化を捉え、そこに考古学的な観察眼でもって、分層の線をひいていきました。aトレンチ（中央の調査区）の長軸に沿った北壁・南壁を見ると、最も大きい西側の棺が埋められたのちに、中央の棺、東側の棺の順に埋められていったものと判断できました。この西側の棺は穴を掘った後に納められ、木棺と穴の隙間に土を入れた後、上を土で覆ったものと考えられます。他2つについても、木棺の痕跡ははまだ確認されていませんが、土層の構造が類似していることから、同様の埋葬方法ではないかと推測できます。私達の発掘調査の成果は29日の新聞・テレビのニュースにてとり上げられました。

また、30日には本遺跡で現地説明会を実施しました。ありがたい事に大勢の方が見学に来て下さり、賑やかな現地説明会となりました。



写真2 現地説明会の様子

そして、前回の「いわかげ」で触れた3号墓出土の弥生土器についてですが、広島県立歴史民俗資料館（三次風土記の丘）の桑原隆博氏・伊藤実氏から、庄原・三次地域で弥生時代中期後葉に比定される「塩町式土器」ではなく、それよりも新しい弥生時代中期末葉から後期初頭にかけてのものである可能性が高いという指摘をいただきました。このことを参考にすると、3号墓の時期は私たちが当初想定していた弥生時代中期後葉ではなく、それより少し下った弥生時代中期末葉から後期初頭といえるかもしれません。

以上が佐田峠墳墓群C地区3号墓におけるⅢ期調査の内容です。9月8日から14日にかけてあと1期間調査予定が入っておりますが、今年の主要調査はこれで終了と

なります。来年の夏には、今回発見された3つの棺の中がどうなっているのかについて調査を行う予定です。
(3年 細石朋希)

コラム2 帝釈峡での生活

調査も残すところ、あと一日となった。私は第Ⅲ期から調査に参加したため、短い期間の中で、なるべく多くのことを学ぼうと積極的に作業しようと思っていた。だが、実際現場に入ると、何を・どこまでして良いのか分からず、邪魔になるまいと小さくなっていったように思う。詰め込みの知識だけでは実践できない、現場で活かせるようにならないと意味がないんだと感じた。

雨の影響で待機・中止となり、自然の力には逆らえないと痛感した日もあった。次の日には何が起こるか分からない、遺構が崩れてしまう可能性もある。だからこそ、毎日の調査結果を丁寧・正確に記録として残す、その重大さを身をもって知ることが出来た。

帝釈峡発掘調査合宿は、緊張の続く日々ではあったが、宿舎に帰ってみんなでその日の調査結果も交えてワイワイ話をしたり、25人分くらいの食事を作ったりと、普段では体験できないようなことばかりで、気がつけばあっという間の一週間だった。

来年は、私たちが現場で率先して作業する立場になる。先輩たちを見ていると、すごいなあ、と思うばかりで来年の自分を考えると不安になるが、すごいと思った気持ちを大切に、この合宿で学んだことをここで終わらせることなく、これからも頑張っていこうと思う。(2年 上田瞳)

コラム3 佐田峠墳墓群の発掘調査に参加して

今回の発掘調査には、チューターである野島先生のご厚意により、短期間でしたが参加させていただきました。

この調査で印象に残ったのは、ある先輩から言われた「自分の考えを持つことが大事。その考えが正しかったとしても、間違いだったとしても」という言葉です。先輩方が先生からよく言われるのだとおっしゃっていました。これは何を学ぶにしてもとても重要なことです。この言葉をよく胸に刻んでおこうと思います。

この調査は、何も知識が無いまま、しかも現場を訪れたことも数えるほどしかない私たちにとって、とても不安なものでした。しかし、先生や先輩方のサポートにより、現場で活動することの大切さを感じる中で、不安は消えていきました。それよりも、広島大学の考古学研究室の一員として学びたい、という意欲が強くなっていくのを感じました。

今回このような経験を積むことができたことは、私たちの強みになっていくだろうと思います。この機会を与えてもらい、とても感謝しています。本当にありがとうございました。(1年 清水麻衣・河野志保)

帝釈今昔その3- 帝釈調査室物語

今回は帝釈峡遺跡群発掘調査の基地、帝釈調査室（正確には広島大学帝釈峡遺跡群発掘調査室）の紹介をしてみよう。この調査室は昭和 52(1977) 年に完成して以来、調査期間中、教員と学生の合宿場となっている。

そもそも帝釈峡遺跡群の発掘調査は昭和 37 年の帝釈観音堂洞窟遺跡の発掘調査から始まるが、当初は学生さんは国鉄芸備線でほぼ半日掛けて帝釈まで出かけていた。途中、備後落合駅で上り線待合せの時間を利用して、評判の立ち食い蕎麦を掻き込むのが常であった。東城駅に着くと、バスで帝釈に向かう。その日の夜は虎屋旅館が決まりの定宿で、最初の一晩を過ごす。これは、次の日から悲惨な合宿生活を控える身の上にとって、小、中学校時代の修学旅行を思い出させるような楽しみであった。次の日、合宿場となる小学校などに移動して、長い夏休みの間、そこで発掘三昧の日々を過ごすことになる。小学校では男子学生は体育館、女子学生は作法室（こんな名称の畳の部屋があったのです）に分れて生活するが、当然ながら調査のミーティングや食事は一緒である。食事は近所のおばさんに依頼して作ってもらう。夜中にトイレに起きる時はすごく怖い思いをしたものだ。

さて、当時の教授は故松崎寿和先生で、不便な合宿の解消を大学当局と地元自治体に粘り強く働き掛け、昭和 46 年には帝釈峡遺跡群発掘調査室（初代担当助手を務めたのが故河瀬正利広島大学名誉教授）を立ち上げ、先述の昭和 52 年に調査室建物の開所の運びとなった。この時、様々な物品購入に奔走していただいたのが、当時、文学部会計係長を務めていた丸本さんで、一刻丸さんの名をほしいままにした、名物係長さんであった、と聞かされている。彼はいいものを誂えるべきとの信念をお持ちで、調査室の道具類が 30 年以上経っても丈夫であるのはそのためらしい。おかげで当時の毛布もそのまま使われ続け、今年ようやく文学研究科の矢野久美主査の鶴の一声、というより女性らしい心配りで、初めてクリーニングなるものをしていただいた。感謝。

調査室の建物はプレハブ 2 階建てで、建て面積 92.2 m²、延べ面積 194.4 m²のなかなか堂々とした外容だ。昨年には玄関上部の外面に、大きな広島大学の看板まで設置していただき、帝釈峡観光客の皆さん方に、それはそれは誇らしげに輝いている（中で暮らす私はちょっぴり恥ずかしい思いでいるのですが）。調査室の建つ土地は面積 552.5 m²もあ



写真 3 帝釈峡調査室宿舎



写真 4 2階実習室

り、広々とした宅地だ。外周の植樹も今では人間の背丈を超えるほどに成長している。この住環境は都会であれば、セレブな気分が優雅な生活を送れるはずだ。しかしながら、もともと水田だった所を埋め立てたためか、湿気が強く、調査始めに玄関ドアを開けると、一気に湿気が凝結し、床がビショビショになるほどだ。これには正直のところ参っている。さて、1階には教員用の寝室兼用の研究室が2部屋、台所兼食堂1部屋、トイレ、シャワー室、納戸があり、食堂の一端は2段ベッドが2つ設置され、通常女子学生の寝室となっている。2階は半分に男子学生用の2段ベッドが6台設置されていて、一見、飯場のたこ部屋風の寝室となっている。その隣が広い実習室となっていて、学生さんがここで、発掘した遺物の洗浄や図面類の整理作業をする。写真用の暗室もあるが、今では物置だ。

これらの部屋の中で、もっとも評判の悪いのがトイレである（一応は水洗式）。事業所では男性用、女性用と分離しなければならないが、ここは共用である。とくに女子学生には不評で、改修するにはお金もかかるし、面積も足りないし、さてどうしようかな、と思いつつながらその場凌ぎの対応をしてきたが、最近、近くの公的駐車場に実にきれいで清潔なトイレが設置されたので、内心ホッとしている。風呂は本当は湯船につかりたいところだが、一人当りの時間がかかり過ぎるので、これはシャワーで勘弁してもらっている。

台所と食堂は、食事当番の学生数人で約20人分の食事を作り、一緒に食事をするので、少々狭く、使い勝手が悪いが、ここも何とか我慢してもらっている。そのためでもないが、いまだに昔なつかしいハエ取り用の粘着紙を天井から何本かぶら下げて、夏の風情を楽しめるようにしている。

今年夏に調査準備のために訪れて見ると、隣接するいままで水田だったところがいつの間にか釣堀になっていた。周囲が開放的になり過ぎ、防犯上あまりにも無防備なのでびっくりした。それで、矢野主査に相談し、施設部で敷地境界にフェンスを設置してもらうことになった。ところが、ここは国定公園内で、自然公園法の規制区域であることがわかった。ややこしい書類を作成して、すったもんだのあげく、ようやく許可が下り、写真のような外観となった。これで防犯上も安心で、看板と合わせて、大学の施設らしい雰囲気を漂わせるようになった。

（調査室長 古瀬清秀）



写真5 調査室北側の柵の様子



写真6 調査室南側の柵の様子

参加者名簿（Ⅲ期 8月26日～8月31日）

広島大学大学院文学研究科 教授 古瀬清秀
同上 准教授 竹広文明
同上 准教授 野島永
同上 大学院生 石貫弘泰（D2生）
小林昴博・迫田苑子・辻村哲農（M1生）
広島大学文学部学生 竹内琢也・谷口早季・細石朋希・横山瑛一・若月美佳
（3年生）
安部智洋・今福拓哉・上田瞳・小川原励・小林彬・小森由佳利・
野村友規（2年生）
清水麻衣・河野志保（1年生）（8/27～28）
愛知教育大学大学教育学部学生 柘植まゆみ・土本真由・二宮知也（4年生）

人物往来

広島大学大学院文学研究科 荒平悠（8/26～28）

陣中見舞い

足羽秀幸（庄原市）	ビール
小森さん御一家	食品
谷岡さん	食品
中越先生	ビール
弥生食堂（帝釈）	菓子

他にも多くの方々大変お世話になりました。ありがとうございます。

編集後記

第Ⅲ期が終わり、両遺跡とも発掘調査を無事終了することができました。調査期間中、たくさんの方にあたたかく見守っていただき、本当にありがとうございました。今年度の発掘調査はこれで終了しましたが、来年度もまた調査を行ないますので、その際はぜひ私たちの発掘調査を見学にいらしてください。お待ちしております。

（編集 辻村哲農）

広島大学考古学研究室 〒739-8522 東広島市鏡山1-2-3 (Tel:0824-24-6663)
帝釈峽遺跡群発掘調査室 〒729-5554 庄原市東城町帝釈末渡野田原 (Tel:08477-6-0101)
研究室ホームページURL <http://home.hiroshima-u.ac.jp/kouko>